

継^{ないで} よかつた SPC

承継インタビュー Vol.7
2021.12 (有)セイシュウ



継^{ないで} よかつた SPC



STAFF

Publisher / SPC GLOBAL

Editorial department
/ SPC GLOBAL 第31代承継プロジェクト
継ないでよかつたSPC 別冊編集チーム
加藤 武彦(東海統括本部)
長島 正男(中央統括本部)
比嘉 薫(中央統括本部)

Edition in chief / 山崎 博文 (株)d2 Factory

Production and design / 株d2 Factory

Title design / 大野 勝彦

Illustration / 照喜名 重樹 (株)CREATIVE SHEEP

© 編集・制作

SPC GLOBAL
〒150-0012 東京都渋谷区広尾1-1-33
TEL 03-6418-0511 Fax 03-6418-0514
H.P. <http://www.spc-global.jp>

(株)d2 Factory
〒135-0048
東京都江東区門前仲町1-13-12-701
TEL 03-5615-8325 Fax 5615-8326
H.P. <http://www.darc.co.jp>

※本誌掲載の記事、写真・イラストの
無断転載を禁じます。 21・12・16

事業所概要

社名：(株)セイシュウ
代表者：浦崎 尚
所在地：沖縄県中頭郡西原町棚原 178-1
設立：1958 年
事業規模：理美容室 4 店舗、訪問美容
従業員数：35 名

資産表

資本金：300 万円
年商：1 億 5,000 万円
粗利益率：89%
借入金：2,000 万円
不動産：自社ビル（店舗・住居）
株式：社長保有

現状の組織図



Homepage

<http://www.seisyu-group.com/>



主な集客サイト

HOT PEPPER Beauty

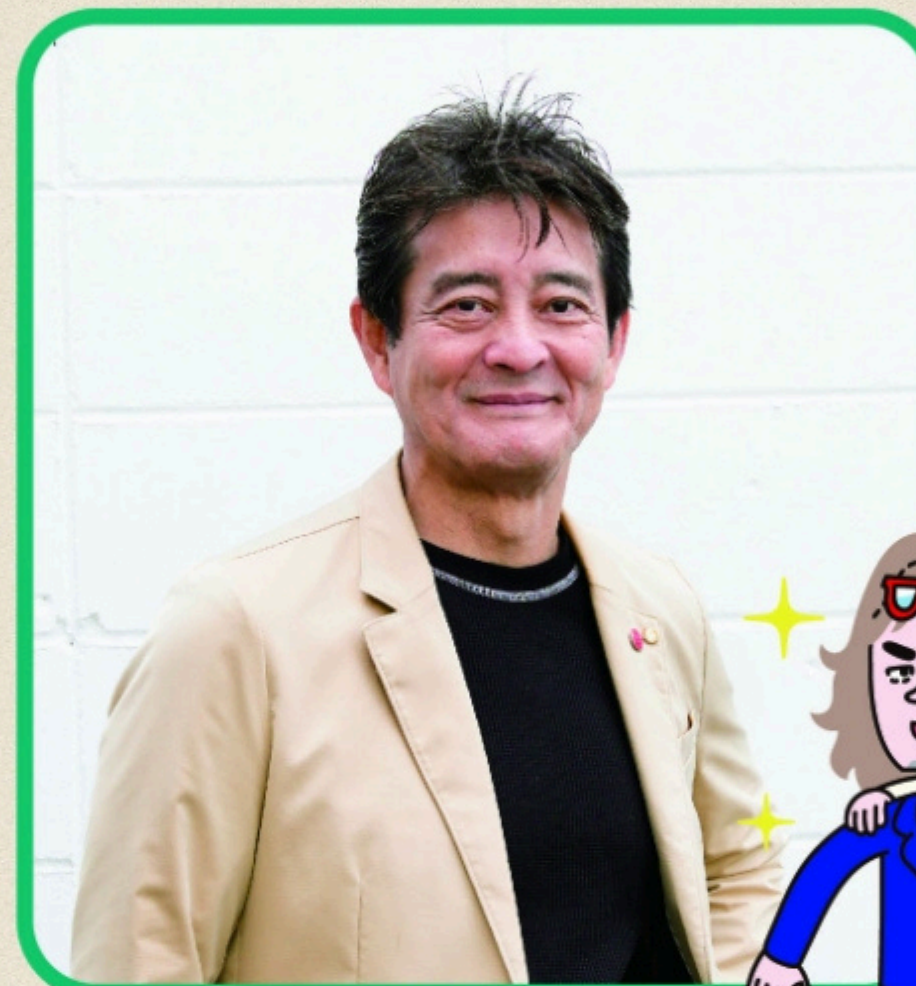


継^{ないで}
よ^{かった}
SPC

今回ご紹介する企業：

(株)セイシュウ

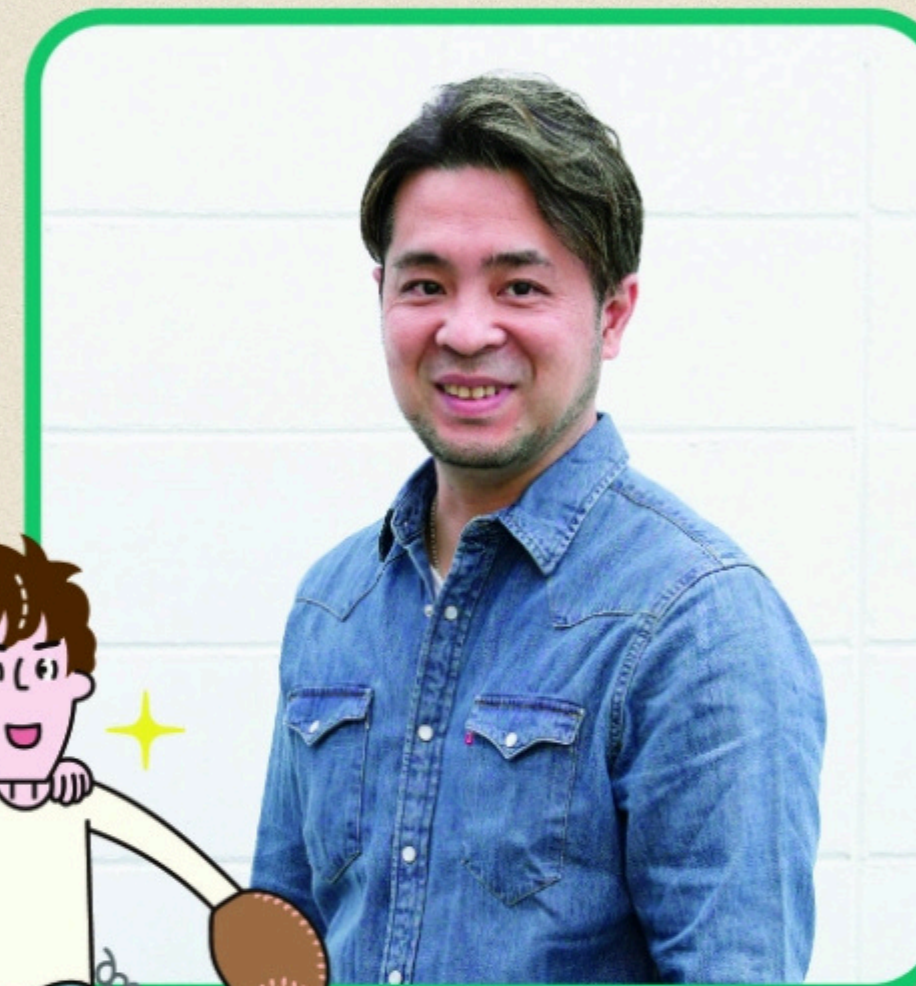
Pitcher



浦崎 尚 (うらさきたかし)

- ・1957 年 1 月 24 日生まれ（現在 64 歳）
- ・SPC 入会：2000 年
- ・所属：沖縄統括本部
- ・出身地：沖縄
- ・主な修行先：東京・麻布のユニセックスサロン
- ・家族構成：妻・長男・次男・長女
- ・創業又は承継時の店舗数：1 店舗

Catcher



浦崎 祥平 (うらさきしょうへい)

- ・1982 年 7 月 28 日生まれ（現在 39 歳）
- ・SPC 入会：2013 年
- ・美容技術経験：あり
- ・経歴：高校在学中に通信で美容免許を取得後、卒業と同時に自社に入社
- ・ピッチャーとの関係：親子（長男）
- ・現在のポジション：マネージャー

経営理念

ミッション（憲章）：「調和」と「貢献」

ビジョン（理念）：「豊かな人生を築く人間形成と仲間作り」

ポリシー（基本軌道）：「元気で明るい笑顔」

失敗と学び、 自分が変わらなければ 自社も変わらない。

今回取材させて頂いたのは、沖縄統括本部の浦崎尚さんが経営する「株セイシユウ」。

浦崎さんは今期第31代にてビューティーブプロジェクトリーダーを務めていらつしやるので全国の皆さんもご存知かと思われるが、SPC沖縄が立ち上げられて第1期生とも言える、在籍20年以上のベテラン会員さんである。

2代目の承継

尚さんは美容師の父のもと、7人兄弟の末っ子として誕生した。浦崎さんが生まれた翌年に「浦崎美容館」が開業され、頭の良かった兄が大学に進学した事を期に、実家の跡を継ぐべく、彼は19歳の時に東京・麻布のユニセックスサロンに住み込みの修行に出た。

当時お付き合いしていた女性性は美容師を目指していた為2人で上京を考えていたが、受け入れ先のサロンが出した条件は何と「籍を入れてくる事」。

修行に出る前に夫婦となったのが、妻の純子さんだ。二人は手取り3万で6畳一間の部屋に暮らしながら、約6年ほど修行を続けた。

そして26歳の時、父の打診で帰京。末っ子ということもあって、父はもう76歳。体が弱ってきていた事もあり、夫婦で店を引き継いだ。

引き継いだ時に店名もリニューアルしたが、彼が設立した「有」セイシユウとは、父・政秀（セイシユウ）の名前から取られている。

こうして彼は2代目として自社を承継し、帰京後すぐに子供にも恵まれ、妻と二人三脚で自社と家庭を築き上げていく。

SPC沖縄発足

順調に店を続け、会社も設立したが、40歳を目前にして「本当にこのまま店を続けるだけでいいのだろうか」と考えるようになり、何か違う事をしてみようとしてSPCに入会した。

ちょうどSPC沖縄が発足した時で、初代会長の田島さんや担当の重谷さん、玉野さんたちのもと、第一期生として活動がスタートした。

後々わかった事だが、自分が入会金を100万円払ったのに、他の誰もがそんな金額を払っていなかったり、会議も13時に誰も集まらなかったり、商

事の支払いも滞納が多かったり、振り返れば発足当時は本当にデタラメな状況だったという。

しかし、よく沖縄に足を運んでくれた横山創設理事長には運転手として移動中に貴重な話をたくさん聞かせて頂くことができたのと、切磋琢磨できる仲間がいてくれたお陰で、挫けることなく続けて来られたぞうだ。

これまで夫婦で平和に1店舗を切り盛りしていた生活は、SPCに入会したことが転機となり、彼の人生は大きく変わっていく事となった。

変化と波乱

これまで職人として腕を磨く日々だった彼にとっては、SPCで美容経営者たちに囲まれる環境はとても驚きの連続だった。

沖縄でも例に漏れず、低料金設定にしてリーフレットで集客する方法は大ヒットし、周りは勢いに乗って出店をどんどん繰り返していき、彼も負けじとその方法に切り替え、売上はどんどん鰻登りに上がっていき、多店舗展開を始めた。

しかし、低料金にした事で客の回転が上がり、現場を回すスタッフは疲弊して行った。次々とスタッフが辞めていく中、それでも募集をしなければ人はたくさん集まってきたので「今時の若い奴らは根性がなくて情けない！」と気にも止めずに出店をやめなかった。

そして3店舗を出店してからとうとう限界を迎えたのか、売上が急激に落ち込み、借金の返済が滞り、税金も支払えず、自分の貯金を切り崩しても足りなくて妻の両親に借金をするなど、大変厳しい状況になってしまった。

尚「あの頃は社員の給料日が怖くて仕方ありませんでした。お

金の心配ばかりで、生きた心地がしないというか、精神的にかなり参っていました。自分に能力もないのに、教わったやり方だけで急激に売上が上がっていった事で、勘違いをしていたのだと思います」

組織での学び

厳しい経営状況の中、上手くいかないのは何が悪いのだろうと、彼は悩むようになった。何か浮上するきっかけが欲しいと、SPCでは資質表現教育を学んだり、役職にも進んでチャレンジして行った。

尚「特に転機となったのは、会長職を2期4年やらせて頂いた事だと思えます。『自責』と『他責』という言葉があります。結局全ては自分の責任。他人のせいにしていくうちは、何をやっても上手くいかない。今目の前の現実が自分が作り上げているんだという『自責』を持つ事。この気づきがなければ、役職は全うできません。これがSPCで得た大きな学びです」

こうして組織での学びが彼を人間として成長させ、自社も徐々に持ち直してきたぞうだ。

3代目の歩み

尚さんと純子さんご夫婦には、長男、次男、長女と、3人のお子さんに恵まれた。長男の祥平さんはちょうど尚さんが会長職を終えた頃にSPCに入会したぞうだ。現在自社ではマネージャーとして複数の店舗を統括している。承継についてはどのように捉えているのだろうか？

祥平「幼少の頃からサロンに入り込んでいて、パーマのペーパーを伸ばす手伝いをしたり

と、美容はとても身近な仕事でした。中学生の頃には、スタッフさんに教えてもらって友達にヘアセットをしたりしていたし、美容師免許は高校在学中に通信で取得して、自社を継ぐのが当たり前だと思ってきました。修行として東京に就職先も決めていたのですが、彼女に子供ができたので、皆に相談して自社に入る事を決めました。弟も美容の道を進み、東京で6年修行してから今では自社で店長をしています。お互い『継ぐ』というよりは『手伝う』という意識でここまで来たように思っています」

承継の構想

自社の承継について考え始めたのは本当にここ最近の事だという尚さん。現状の考えを聞いてみた。

尚「今はこういう風に自分の身を引こうかと考えていて、自社では息子2人の他に、15年、20年と勤続してくれている社員たちに店長を任せているし、役職についていなくても10年以上続いているスタッフが複数いるので、今後は暖簾分けをしていく事も考えています。ここまでついてきてくれた社員たちにもしっかりと未来を作っておきたいので、暖簾分けの為に出店も考えていて、資金援助も含めた独立支援をしていきたい。」

各店舗をそれぞれの人材に分けていくと言っても、決して切り離す訳ではなく、例えば代表を交代する時に息子に継がせる店が1店舗になったとしても、協同組合のようにまとまる事で利便性は強化してお互いがちゃんと手を取り合って進んで行ってくれたらと考えています。それができる関係性は既に出来上がっていると信じています」



Syohei-Urasaki



Tadashi-Urasaki

人は何故生まれてくるのか？ それは、幸せになるためだ!!

イズムの根幹

日本では仏教や神道が多く根付いているが、沖繩では儒教が深く根付いているそうだ。尚さんご自身の考え方や会社の理念においても儒教がベースになっているようである。

尚「何で生まれてきたのか？それは、幸せになる為。でも、幸せになれる人も多い。誰にでも幸せになる権利があるのに、何で幸せになれない人がいるのか？それは何かバランスを崩しているからだと思えます。我が強いとか、正しさを一番にするとか、協調性がないとか…バランスを崩しているから、思い通りにいかない。豊かになりたい

理念の浸透

せっかく4店舗ある店を社員たちに暖簾分けして分散してしまう事に、長男の祥平さんは不満を持たないのだろうか？直球で質問をさせて頂いた。

祥平「自分が代表になる時が来て、もし店が1店舗になっていたらとしても、それは父が会社の為を思っていた判断だと思うので、そのまま受け止めます。全ては人があってこそですし、それを考えて父は判断をすると思っている。今は自分が口を出すことはありません。」

今のところは、自社に対して自分がどうしていきたいか思い描く事は何にもないです。そ

れは社長を引き継いだ時に、新たなスタートを切るという意味で、改めて自社の未来を考えたりするのでしよう。でも引き継いだ後も、会長の意思は尊重し続けます」

尚さんの考える未来構想は、後継者である実の息子からしたら本当に納得のいく形なのか、客観的に見たら疑問であったが、そこにはしっかりと「あなたは、何で生まれてきたのか？幸せになる為でしよう？」というイズムが浸透していた。

尚さんは早朝にスタップを誘ってよくコーヒーを飲みに行き、「あなたは何で生まれてきたのか？」と質問をしているそうだ。最初は「朝から何を言ってるんだ？」という顔をされるそうだが、言い続けると浸透していくのだという。

尚「もちろん会社だから、儲ける儲けないって数字や営業の話があつて当然ですが、売上以前に大事な話すことがあると思うのです。何故生きるのか、何故働くのか、自分なりの答えを持っておく事が大事です。他人とはよく会話をしても、自分とはあまり会話をしないでしよう。何で生まれてきたのか、この究極の部分を共有し合うことで人間関係は深まっていくのです」

組織の承継

今回、取材という形で父から改めてこれまでの失敗や学びなど、SPCと自社の歴史を知ることができたことは、祥平さんにとって大事な時間帯になったことだろう。

前期はスタイリングコレクション実行委員を務め、やるべきことや目標がわかりやすい中で組織活動ができていた祥平さんだったが、コロナ禍により会議もリモートに慣れてきてしまった。昨今、「SPC活動の楽しさがまだ見出せていない」と正直な胸の内を明かしてくれた。

尚「組織活動が面白くない？それは自分の責任だな！学びなんでものは、どこにでもある！偉い人の凄い話を聞けば学びになるのか？それは違うでしょう。自分より売上が低かろうが、キャリアが短かろうが、誰からでもどんな人からでも学べる。学ぶ力を身に付けることが大事なんだよ。臨店して他社を参考にしたり、情報を仕入れる事ももちろん学びの1つだと思つた。自分の学びをどう受けるか、自分がどう学びを受けられる体制を整えるか。SPCにいれば、どんな事からでも学べると気がつかれる。それが組織活動の真髓だと思つた」



各地のSPCでもたくさん二世や次世代を担う若手会員が増え、一見活性化しているように見えるが、懇親会などリアルな触れ合いが減っている。友人間同士のぶつかり合い、研鑽の場も希薄になりつつあるのかもしれない。

尚「最近の定例会議を見てても、インプットは出来ていない、アウトプット、自分の思いを話すという事がなかなか出来ていないように思う。人の腹は探るくせに、自己開示しない。時代も人も変わるから、今と昔で悩みが違つるのは当たり前で、同じ言葉や出来事でも、経験の有無や育つた環境、性格、人はそれぞれ違うから、受け取り方が

違う。仲間や先輩にさらけ出して、他人の経験談、考え方や在り方を聞くことが問題解決の鍵になる。

最近、ビューティーをやっている中でよく『泥棒と乞食』の話をするのですが、SPCは泥棒の集まりだ。誰かから貰えるまで待つてはいけません。SPCに入ったからつて、SPCは何もくれない。自分が動かないと、自分が変わらないと、自社も変わらない。自分が何を考えて仕事をしているかというの、自社にとても影響する。常に自分が活性化していないと、会社も組織もエネルギーが保たれない。自分が良くなれば、会社も良くなる。社員は社長しか見ていないのだから、社員教育より自己教

育が一番に来ないといけない。

よく『役職が人を育てる』と言いますが、SPCでは無理やり着たくないジャケットを着せられる時がある。最初はプカプカで似合わない。でも、着こなしたから袖を詰めたり肩幅を合わせたり、似合うように修正していく。そして着こなせた時に自分が成長している。これがSPCの凄いとところで、ポラナリーで何の見返りもない中で、役割をやり切る。これは『自責』の気づきがないと全うできない。私自身、会長職を通じてとても成長させて頂きました。これは会社でも同じで、役職を着こなせるスタップだけが自社の風土や理念に合つて育つていく。

人は一人で生きていたら「自分とは何か？」などとは考えない。他人と生きているからこそ考える。その答えを求めなくても生きていけるけれど、答えを求めている人といない人では決定的な差が出てくる。仕事でも何でも同じで、結果が変わってくる。『使命』は自分で取りに行くもの！自分で見つけ出さないと見つからないし、自分で探している人にしか掴めない」

尚さんから、このような貴重なお話を頂いた。承継プロジェクトを元に、自社の承継の準備を始めた会員さんは全国にたくさんいらっしゃる。後継者が実子であっても社員さんであっても、SPCに入会させる事を検討されている方も多いのではないだろうか。組織活動においても、ただ漠然と身を置かせるのではなく、歴史や学びと共に繋いで行って頂けることを強く望む。

「人は何故生きるのか？
幸せになる為でしよう」

尚さんが全ての指針にしているこのキーワードこそ、SPC哲学の「根拠と原因と結果の法則」の「根拠」である。SPCが皿にこだわる意味がここにある。この学びが次世代にも浸透していけば、各社もSPCも永続していくに違いない。